九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[057_2016]第57回附属図書館貴重文物展示 : 真仮名、かな、カナ : 仮名と文体の発達史

高山, 倫明
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

蛭沼, 芽衣
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

門屋, 飛央
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

巣山, 優希
九州大学大学院人文科学府 : 博士課程

他

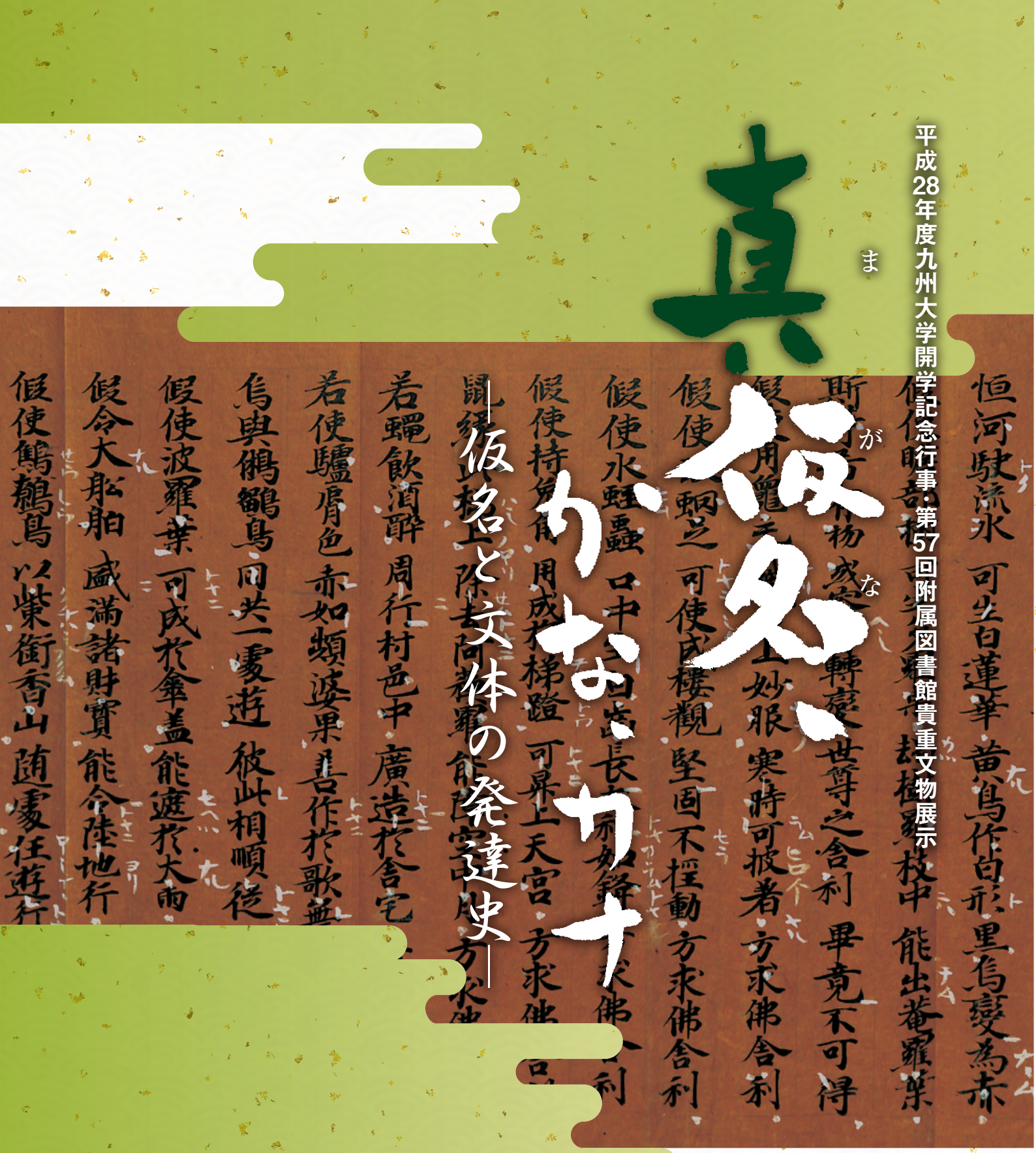
https://doi.org/10.15017/1657353

出版情報：展観資料, 2016-05-13. Kyushu University Library
バージョン：
権利関係：

平成28年度九州大学開学記念行事・第57回附属図書館貴重文物展示

真仮名（まがな）

―仮名と文体の発達史―



九州大学

関連講演会

「万葉仮名の世界」

～『仮名発達史序説』続貂～

2016.5.21 土

入場無料　申込不要

講演者：高山倫明氏

（九州大学大学院人文科学研究院 教授）

九州大学中央図書館4階視聴覚ホール

14:00～15:30（13:30開場）

展示会開催にあたって

九州大学附属図書館長　宮本一夫

九州大学附属図書館では、開学記念行事の一環として、九州大学が所蔵する貴重書文献等の展示会を昭和五四年から毎年開催しており、本学の学生、教職員だけでなく、一般市民の方にも多数ご来場いただき、お陰様で高い評価をいただいています。

今回の展示会では、「真仮名（まがな）、かな、カナ―仮名と文体の発達史―」と題し、九州大学附属図書館が所蔵する「春日政治（かすがまさじ）・和男（かずお）文庫」を中心に、万葉集などで見られる真仮名（万葉仮名）の表記から仮名、書き言葉の成り立ちを紐解いていきます。

春日政治・和男文庫は、九州大学文学部国語学・国文学講座の主任教授として父子二代に渡って訓点語学の研究をされた春日政治・和男両博士のコレクションで、平成二五年にご遺族から寄贈いただきました。訓点資料を中心に、国語学・国文学全般にわたる古写本や古版本など約四〇〇点からなり、類本のない貴重書を多く含んでいます。今回は、その中でも特に貴重な「金光明最勝王経」、「紺紙金字無量義経」、「根本薩婆多部律摂　第七巻　断簡（足利尊氏発願一切経）」、「慶長勅版　職原抄」の四点を一挙にご覧いただけます。

開催期間中の五月二一日（土）には、展示の監修をされた本学人文科学研究院の高山倫明教授による公開講演会を開催いたします。ぜひこちらにも足をお運びいただけますと幸いです。

九州大学では平成三〇年度に伊都キャンパスへの移転完了を控えており、今回の展示会は、この歴史ある箱崎キャンパスで開催する最後の貴重書展となりました。これまでのご支援に感謝するとともに、移転後も変わらぬお引き立てを賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

今回の展示会にあたりまして、高山教授ならびに文学部国語学・国文学研究室の研究者の方々に多大なご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成二八年五月一三日

真仮名（まがな）、かな、カナ

―仮名と文体の発達史―

春日政治・和男文庫の概要

春日政治・和男文庫（以下、春日文庫と略称）は、春日政治（まさじ）（一八七八―一九六二）・和男（かずお）（一九一五―二〇一二）の父子二代にわたるコレクションである。両博士は、ともに九州大学文学部国語学・国文学講座の主任教授として、日本語史研究、とくに漢籍・仏典類に付された種々の記号（訓点）の類から、仮名や文体の発達をはじめ、様々な言語史的事象を探究する、訓点語学の研究に邁進された。

政治博士は国文学講座の初代教授として、また三代目の図書館長として活躍、九州大学の初期蔵書形成に大きく貢献した。自らも、戦前・戦後を通して展覧会等で多くの貴重書を出品するなど、九州では田村専一郎氏（支子文庫旧蔵者）と並ぶ蔵書家として知られた。和男博士も同じ道を志し、国語学会評議員・理事を勤め、また訓点語学会会長として斯学を牽引された。

同文庫は、訓点資料を中心に、国語学・国文学全般にわたる古写本・古版本など約四〇〇点からなり、類本のない貴重書を多く含んでいる。このコレクションは、両博士が生涯をかけて追究した日本語史研究、とりわけ表記史・文体史研究の貴重な資料群であり、漢字を表音的に用いた真仮名（まがな）（万葉仮名）から仮名へのプロセスや、書き言葉の成り立ちを雄弁に物語るものでもある。今回の展示を通して、日本語が辿ってきた道のりに思いを馳せていただければ幸いである。

なお、蔵書については、かねてより和男博士ご本人から、中野三敏名誉教授を介して九州大学へ寄贈の意向が示されていたが、平成二四年七月のご逝去の後、ご遺族（長男春日和行氏）よりあらためて寄贈の申し出があったものである。ご遺族も、散佚させずに縁のある九州大学で所蔵されることを希望され、一部の九州キリスト教関連資料以外は、一括して寄贈を受け入れることとなった。平成二五年七月末に横浜市港南区の春日家より資料を搬出、燻蒸の後、八月末に九州大学附属図書館に搬入された。また、九州大学がすでに所蔵していて重複本となる洋装本や講義ノートの類は、とりあえず文学部高山研究室にて保管することとなった。なお、一連の蔵書受け入れに際しては、中野名誉教授、今西裕一郎名誉教授、松原孝俊韓国研究センター長の絶大なご尽力があった。

春日政治名誉教授略歴

明治一一年　長野県生まれ
明治四四年　京都帝国大学文科大学卒業
大正一五年　九州帝国大学法文学部国文学講座教授
昭和一一～一三年　九州帝国大学附属図書館長
昭和一三年　九州帝国大学定年退官　のち九州大学名誉教授
昭和一五年　斯道文庫長
昭和一九年　西日本文化賞受賞
昭和二〇年　『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』で帝国学士院賞受賞
昭和三七年　没
『仮名発達史序説』『古訓点の研究』等、著書多数

春日和男名誉教授略歴

大正四年　長野県生まれ
昭和一五年　京都帝国大学文学部卒
昭和二五年　九州大学教養部　のち文学部教授
昭和五九年　九州大学定年退官　のち九州大学名誉教授
平成二四年　没
『説話の語文』『語文叢考』等、著書多数

春日政治博士

春日和男博士

不入寺田僧婆塞加取百餘引石塞於
門入於寺田王等恐乎僧婆塞之力而
不犯故寺田不乾而能得之故寺衆傳
合得度出家名號道場法師後世人傳
元興寺道場法師強力多有事也當知
先世強修能縁所感之力也是日本国
之事也

謹誥二ケ合伊佐乎敷食国二ケ合久尓平主淳泥也太不絶和止
夫メツクル小細雨ニ合ニナ撰ツ鬚毛リ試ニニ指攢

一　万葉集の表記

九五一（天暦五）年、後宮に撰和歌所が設置され、古今和歌集に続く二番目の勅撰和歌集である後撰和歌集の撰集とともに、万葉集に訓点を施す作業が開始された。ことにあたったのは「梨壺の五人」と呼ばれる当代一流の学者・歌人たちである。万葉集は、その成立から二百年もたたないうちに、専門家による「解読」を必要とするほどに読めなくなっていたのである。

万葉集は漢字ばかりで書かれている。漢字はいうまでもなく外国の文字である。それを自家薬籠中のものとするために、上代人はさまざまに模索し、種々の実験を行った。万葉集の表記はさながらその見本市ともいうべきもので、じつに多様である。その後、漢字をもとに仮名が発明され、やがて「漢字仮名交じり」という日本語に即した表記システムが確立するが、万葉集はその前夜に生まれた。日本語表記史上特筆すべきこの転換期をはさんで、万葉集は比較的短期間のうちに、簡単には読めない存在になっていたのである。

(1)春楊葛山発雲立座妹念
春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしぞ思ふ
（巻十一、二四五三番）

(2)和我世故我可反里吉麻佐武等伎能多米伊能知能己佐牟和須礼多麻布奈
我が背子が帰り来まさむ時のため命残さむ忘れたまふな
（巻十五、三七七四番）

(3)熟田津尓船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜
熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな
（巻一、八番）

(1)の歌は略体と呼ばれる表記様式で、非常に簡潔なスタイルである。漢字の字面を見ればだいたいの意味は把握できるが、音数律によってある程度絞られはするものの、読みの確定には困難が伴う場合が少なくない。現に、この歌の場合、初句を「あをやぎの」と読む説もある。民謡調のパターン化したフレーズのように、読み手にとってある程度予測可能な歌に適した表記であるといえよう。葛城山に立つ雲のように、立っても座っても、絶えずあの娘のことを思うのだ、という恋の歌。「立居振舞」「居ても立っても」という言葉があるように、「居る」はもともと「立つ」の対義語で「座る」の意。雲は立ち上ったり山の端に居座ったりするので雲居という語があるが、この歌の場合、「〜雲の」までが「立ちても居ても」を効果的に引き出す序詞である。ブロークンな漢文逐語訳のような体裁は、たとえば次のような英訳俳句を想起させるものがある。

Old pond — frogs jumping in — sound of water
（小泉八雲）

(2)は、罪を得て流罪に処された夫の帰りを待つ新妻が、あなたがお帰りになる時のために、焦がれ死にそうなこの命を残しておきましょう、お忘れにならないでね、と訴えた切々たる愛の歌。これはすべて借音仮名による表記である。漢字の意味が捨象され、その音だけが利用される場合を借音という。狭義の万葉仮名は、この用法で用いられた漢字のことを言う。一字一音の借音仮名で書かれたものは読み方を確定しやすいが、意味の把握には困難が伴う場合もある（現代でも仮名ばかりで書かれた文章は読みにくいものである）。漢字一字は中国語の一単語であるから、借音の文字列は、中国人にとっては無意味な中国語でもある。これは、表記原理としては、次のように英単語の意味を無視して発音だけを利用した言葉遊びに近いものがある。

Free care car was to become Ms. Note.

(3)の歌はちょっと複雑である。「熟田津」は固有名詞なのでちょっと置いておくが、それに続く「尓」は借音である。この漢字には「おまえ」とか「その」といった意味があるが、この場合は表そうとする内容と関係がない。次の「船乗」は日本語として訓読する。訓は漢字の意味を日本語に移したものであり、その意味が生きているものを正訓、その訓の音（外形）のみを利用したものを借訓という。この場合は「船に乗ること」の意味を表しているので正訓である。続く「世武登」は「セムト」という日本語の発音を写すための借音。続く「月待者」「潮」はともに訓読してその意味が生きているので正訓、「毛可奈比」は借音である。次の「沼」は、その訓の「ぬ」（ヌマを古くはヌともいった）の発音が、いわゆる完了の助動詞「ぬ」を表すために用いられている。漢字の本来の意味とは無関係なので借訓である。「今者」は正訓、「許芸」は借音。最後の「乞」「菜」は、ともに借訓である。「乞」には請い願うの意味があり、人を勧誘する際に用いる日本語「いで」の訓があたる場合がある。ここはその訓の発音を利用して「出で」を表している。「菜」の訓「な」は副食物の総称だが、ここでは終助詞の「な」を表している。

（次頁下段へ）

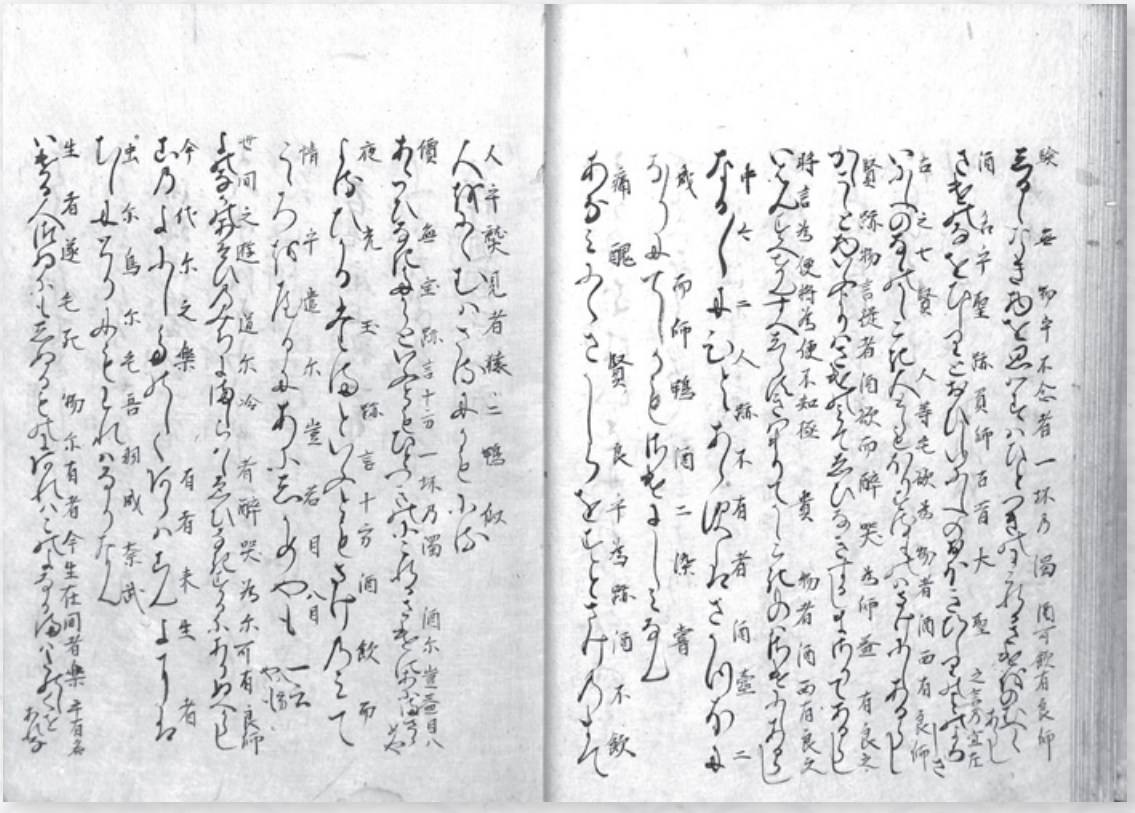
永暦元年奥書本万葉集（順万葉集）

伝司農少卿伊行　永暦元 (1160)写　20冊　25.1×18.3cm（春日文庫/64）

写本。袋綴じ。全20巻。外題に「順萬葉集」とあり、奥書に「本云／斯書以源順自筆為家之證本書寫之功畢／司農少卿伊行／永暦元年孟春日」とあり、源順自筆の由緒がある本を、「司農少卿伊行」が永暦元（1160）年に書写したものとされる。

本書は表記に特徴がある。題詞・詞書は、漢字に平仮名による訓が付され、左注は、漢字に一部返り点や平仮名に拠る部分的な訓が示されている。歌は、平仮名で記され、その右脇に小書きで万葉仮名が施されている。

奥書に名前のみえる源順は、萬葉集に訓点を付して読みを示す作業に携わった梨壺の五人の一人として有名な平安中期の歌人である。このことから、「栂尾切」など伝源順筆とされる萬葉集はあるが、現存しない。「司農少卿伊行」とは、平安時代後期の能書家として知られる藤原伊行のことである。伊行の筆跡は京都国立博物館所蔵の国宝「芦手絵和漢朗詠集抄」によって確かめることが出来る。（藤田）



このように種々の表記原理が混在しているところは、次のような言葉遊びに一脈通じるものがある。

You might think do, today's hot fish
（言うまいと思えど今日の暑さかな）

think、today's、hot は（1）のように英語の意味が生きており、You might は（2）と同様に音のみの利用、fishは訳して「サカナ」に置き換えるのだが、「魚」の意味は捨象するので右の借訓にあたる。

万葉歌のうち、（3）のような一見複雑な表記様式は、しかしけっして特異なものではなく、むしろ主流と言ってもいいくらいである。その理由については、現存最古の史書『古事記』（和銅五（七一二）年）の序文の記述が参考になる。撰録者太安万侶は、舎人稗田阿礼が誦習した物語を文字化するにあたり、その表記方針を次のように述べている。

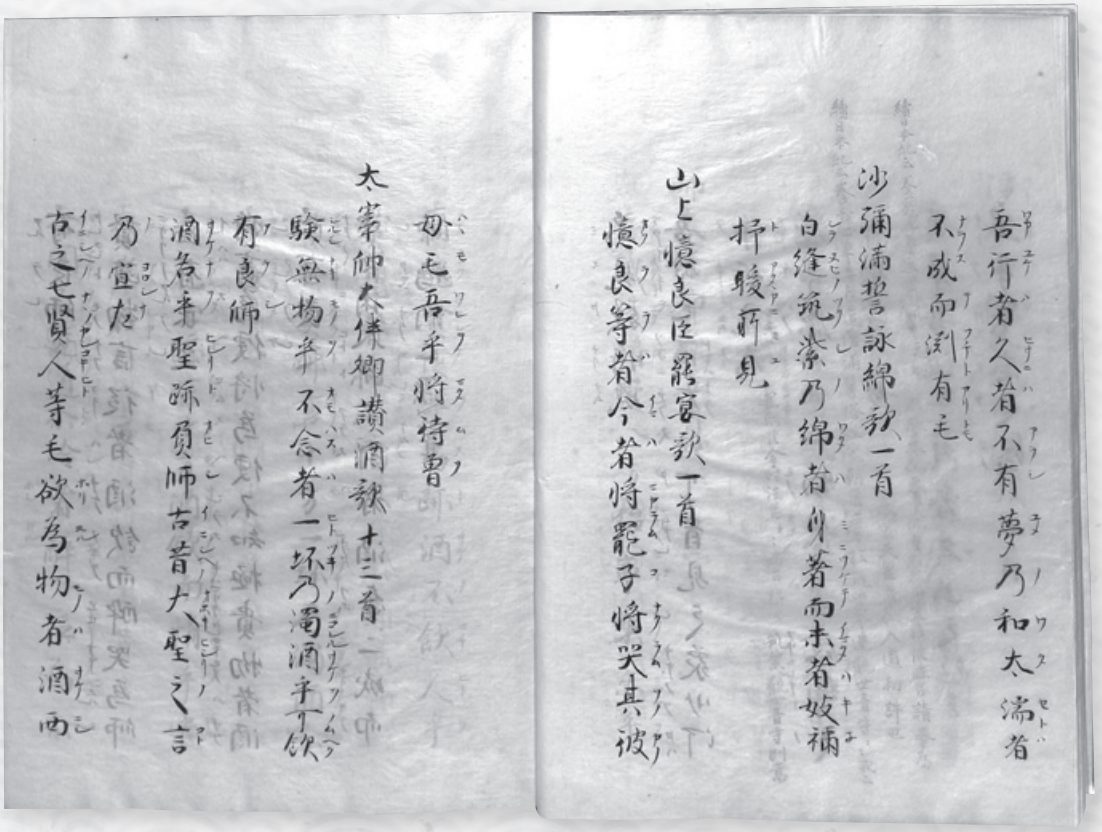
然、上古之時、言意並朴、敷文構句、於字即難。已因訓述者、詞不逮心。全以音連者、事趣更長。是以今、或一句之中、交用音訓、或一事之内、全以訓録。即、辭理叵見、以注明、意況易解、更非注。

すなわち、上古は言葉も心も素朴で、その意味するところを漢字を使って書き表すのは困難だ。すべて漢文に翻訳してから訓読するのでは上古の言葉の心を伝えきれないし、すべて音訳したのでは文章が長くなりすぎてよみにくい。そこで、ある場合は音訓を交え、ある場合は全く漢文で記した。判りにくいところには注を加え、簡単なところは加えなかった。

中院本万葉集

[玉井定時]　[元禄2(1689)～元禄4(1691)]写　20冊　24.3×17.8cm(春日文庫/107/2)

塗り箱(紐付)帙入全20冊の写本。書写行程表によると奈良奉行所の与力であった玉井定時が元禄2(1689)年から元禄4(1691)年にかけて書写したものである。墨付1082枚に及ぶ本書は、表紙に紺紙金泥を使用し、各巻の見返しには梅に鶯、裏見返しには蛙の絵が添えられている。本文は薄様に墨書きで、万葉仮名で書かれた歌の右傍に片仮名で付訓が示される。また、朱筆の注や朱点による歌の句切れを確認することができる。佐々木信綱著の『萬葉清話』184頁には「玉井定時書寫の萬葉集」という章があり、本書についての解説が書かれている。(巣山)



仮名の発達と文体の発達

つまり、先ほどの万葉歌の(1)のような翻訳主体の方法、および(2)のような一字ずつ表音的に記述する方法の問題点をそれぞれ挙げ、結局は両者を取り混ぜた(3)のような方法を基本とし、必要に応じて注も施すというのである。たとえば同書の冒頭は次のように書かれる。

天地初発之時、於高天原成神名、天之御中主神【訓高下天云阿麻、下効此】

【　】の中は、原文では小字2行書きの割注形式で書かれた、訓注と呼ばれる注記で、「高」の下の「天」を「阿麻」と訓めというのである。これによって「高天原」が少なくとも「たかあめのはら」のようなものではないことが判る。「たかあまのはら」または「たかあまがはら」と読ませたいのであろう(現代人にとっては十分な情報とは言いがたいが、当然ながら同時代の読者に伝わればそれでいいのである)。また、ちょっと後には次のような記述もある。

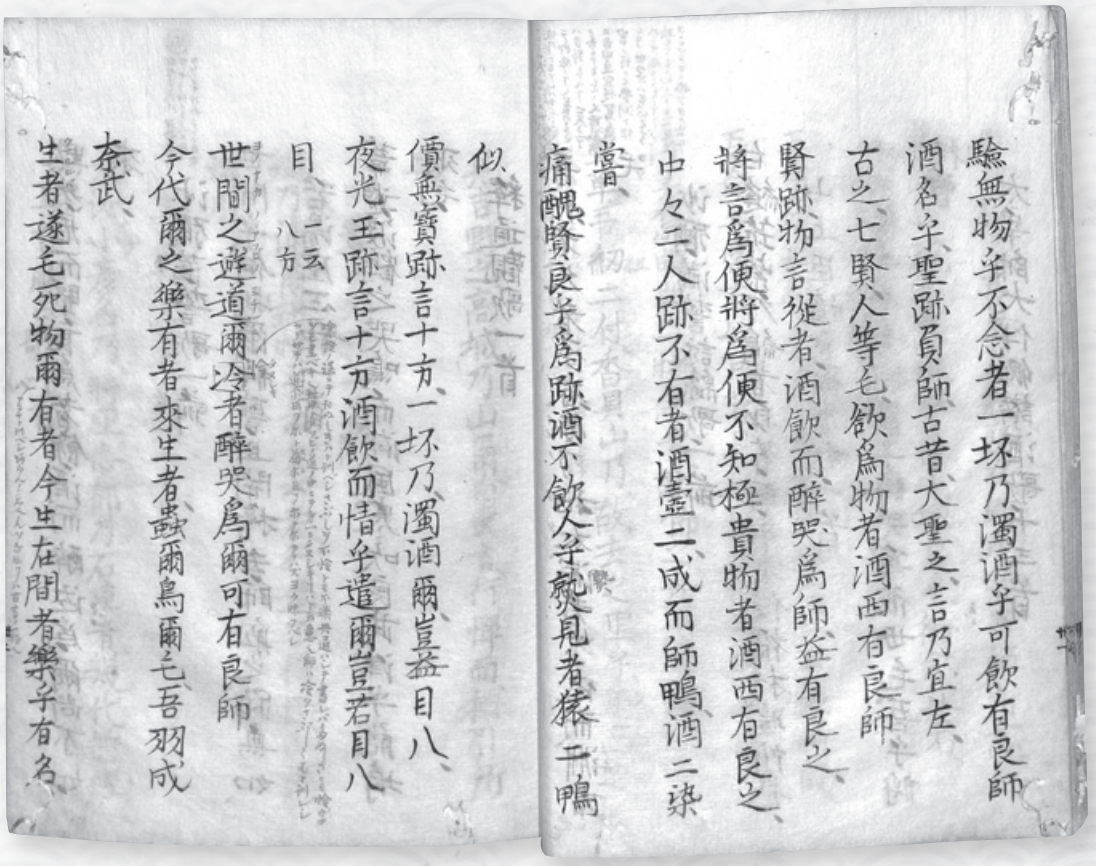
次国稚如浮脂而久羅下那州多陀用弊流之時【流字以上十字以音】

「流」字から上の十字は音読みにせよという訓注に従って「久」字からは意味を無視して音読すると「くらげなすただよへる」となる。国がまだ稚く浮いた脂のようで、クラゲみたいに漂っているそのときに生まれた神の名は、と続いていく。「海月」「漂」といった漢字では上古の心が伝えきれないと判断したのであろう。川上から大きな桃がドンブラコッコ、といった昔話の口吻のような趣が伝わってくるようである。

万葉集（伴信友書入本）

[書写者不明]　[江戸時代中期]写　20冊　27.3×19.4cm（春日文庫/1）

大本20巻20冊。寛永版本の写しで文化元（1804）年をさほど遡らない頃の書写かと思われるが、江戸後期の国学者、伴信友（1773－1846）自筆の書入れが多数あるところに価値がある。文化元年3月には田中道麻呂「撰集万葉徴」、同年7月には本居宣長「万葉集玉の小琴」の所説のすべてを上欄に書き込んでいる。宣長没後3年にあたり、信友は32歳、後の万葉研究の土台を築く作業であったと考えられる。なお、その後の所有者数人の書入れや蔵書印もある。（高山）



たしかに、意味をとるべき漢字と、そうではない漢字とを上手に区別しさえすれば、（3）のようなやりかたはけっこう合理的である。

熟田津尓船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許藝乞菜

傍線部分を仮名にすれば、

熟田津に船乗せむと月待者潮もかなひぬ今者こぎいでな

のように、後世の漢字仮名交じり文まであと一息のようにも見える。ある程度慣れればだいたいの見当はつくようになるのだが、両者の区別が何らかの方法で明示できれば、なおいいだろう。

その一例が宣命書（せんみょうがき）である。これは祝詞（のりと）や宣命といった、声に出して読み上げる文書に用いられ、意味を無視すべき漢字が小書きにされて誤読を防いでいる。

天津神波天磐門乎押披弖（あまつかみはあめのいはとをおしひらきて）

宣命書

また、両者を書体の違いで区別することもできる。意味を無視すべき漢字を草書体、あるいはそれ以上に簡略化すれば、やがて平仮名につながっていくのである。

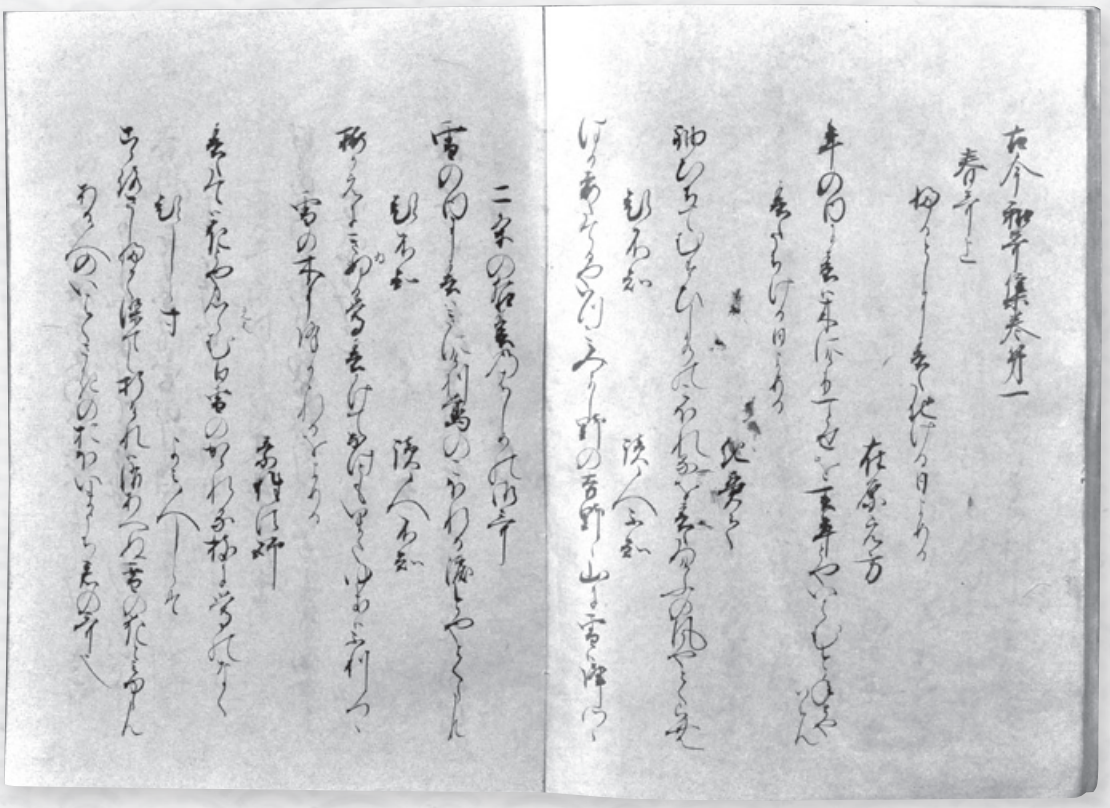
漢字をアルファベットのような表音文字として用い、外国語などの音を写したものを音

八代集（二十一代集中）

[書写者不明]　[江戸時代]写　11冊　25.8×17.7cm（春日文庫/108）

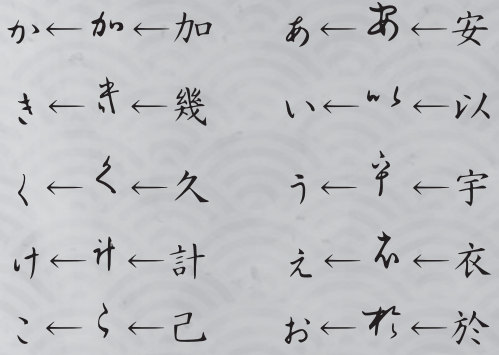
黒塗り箱入りの写本。江戸時代に書写されたと推定される。塗り箱の側面には縦長の穴が穿たれ、中の本を取り出しやすい工夫が施されている。春日博士蔵の八代集は後撰集、後拾遺集、千載集がそれぞれ上下巻に分かれており、全11冊に及ぶ。表紙は紺紙金泥で本文には鳥の子紙が使用されており、装飾的な和歌集である。題箋はなく、装丁は綴葉装。本書の新古今和歌集については『新編国歌大観』の第1巻歌集部813頁に後藤重郎氏による解説文が掲載されており、それによると承元3（1209）年6月19日藤原定家写本の流れを汲む。塗り箱の内には本書の他にも廿一代集巻頭和歌筆者の目録などを付す。

『八代集』は平安時代中期から鎌倉時代初期にかけて撰集された八つの勅撰和歌集の総称である。具体的には延喜5(905)年成立の『古今和歌集』に始まり、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』『千載和歌集』、元久2(1205)年成立の『新古今和歌集』までを指す。（巣山）



訳漢字という。日本では、六世紀頃の金石文の固有名詞表記に早い例が見られ、その後、奈良時代まで日本語表記に広く用いられた。万葉集に多用されるところから万葉仮名の名称が広く行われている。

日本国内で日本語が文字で写し取られた最初は、漢字・漢文の知識を持った渡来人による、固有名詞の音訳漢字表記であろう。やがて日本人（＝日本語母語話者）自らが書いた可能性のあるものが散見されるようになり、外国文字を使って自分たちの言語を写し取っていくための試行錯誤が始まる。そして、やがて奈良時代の『古事記』『日本書紀』『風土記』といった漢字文献に至ることになる。



平仮名字母

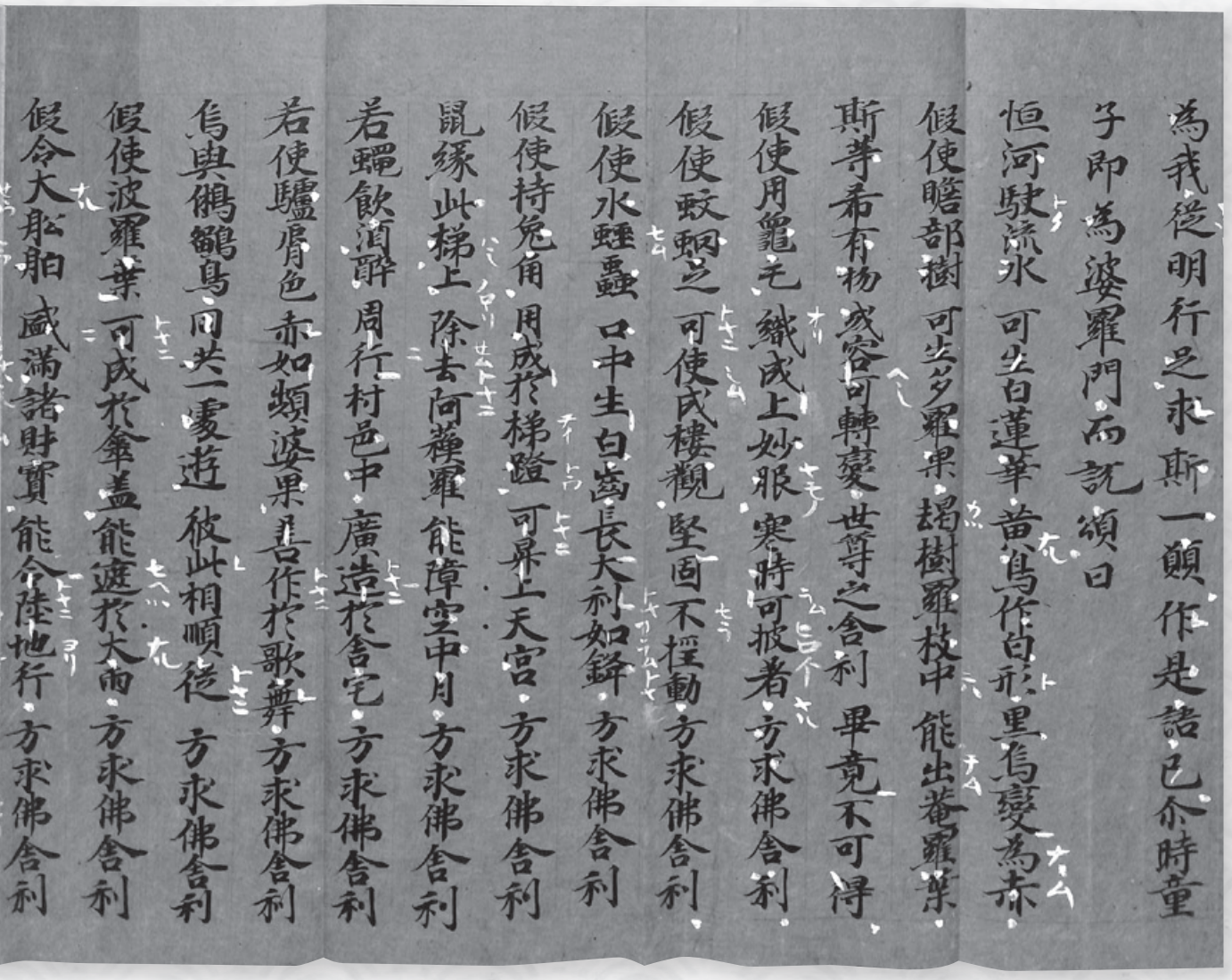
金光明最勝王経

[書写者不明]　[奈良時代末期] 写　10帖　24.2×8.5cm(春日文庫/104)

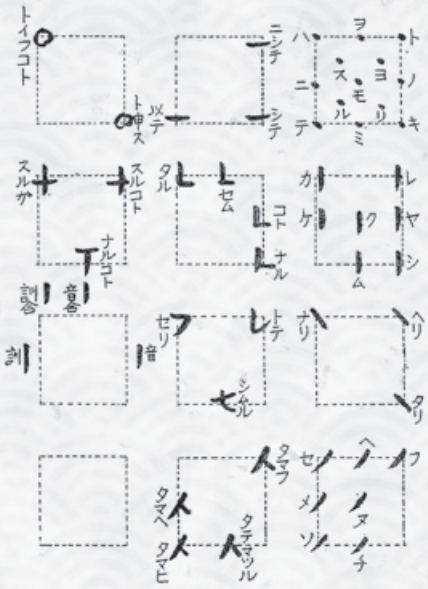
折本十巻。『金光明経(suvarṇa prabhāsa)』は、北涼(5世紀)から唐代(8世紀)にかけて5回の改訳を経ている。その最後期に、義浄によって漢訳されたものを『金光明最勝王経』という。この経を広宣読誦する王国があれば四天王・弁財天などがその国土を擁護し人民を安穏ならしめ、また国王が正法をもって民衆を統治すれば国土は豊楽、諸天善神が守護すると説くため、中国に流伝すると本経は大いに信仰された。日本では天武朝以後、『仁王般若経』とともに護国の経典として全国的に講説読誦が行われるようになった。聖武天皇が天平13(741)年に発布した国分寺建立の詔は、この経の信仰から出ている。

現存する『金光明最勝王経』の古点本は、西大寺本、唐招提寺本、五島美術館蔵本、東京大学国語研究室蔵本などが確認されているが、西大寺本以外残巻であるため、本学所蔵の『金光明最勝王経』は十巻全てを揃えた点でも重要な一本である。元は巻子本だったものを折本に改装したようで、天地が切断され、書き入れや本文の一部が失われている箇所もある。識語や奥書は存しないが、本文は奈良朝の書写、訓点は平安中期～後期に加点されたものと推定されている。加点は、巻第一の序品のみ朱墨で、以下はすべて白墨による。朱点・白点とも東大寺点(三論宗点)に属するものである。朱墨は褪せており見にくくなっているが、白墨は非常に明瞭に残る。

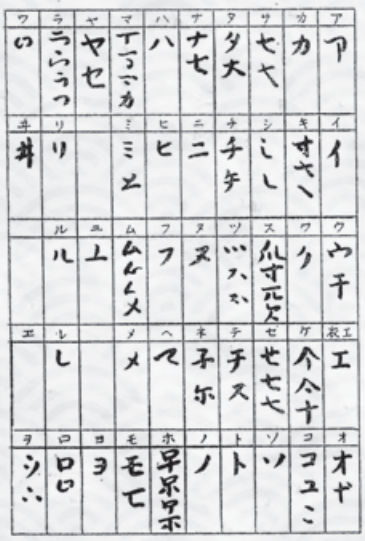
本経は、石山寺に旧蔵されていた石山寺一切経の一部である。下図は全31品(章)のうちの第二品「如来壽量品」の一部で、仏舎利(如来の遺骨)を求める婆羅門(僧)に対し、喜見童子が、如来は不滅であり、入滅していないのだから仏舎利は存在しないと説く場面である。(蛭沼)


為我從明行是求斯一顛作是語已尒時童
子即為婆羅門而說頌曰
恒河駛流水　可生白蓮華　黄鳥作白形　里鳥變為赤
假使瞻部樹　可生多羅果　羯樹羅枝中　能出菴羅葉
斯等希有物　或容可轉變　世尊之舍利　畢竟不可得
假使用龜毛　織成上妙服　寒時可披者　方求佛舍利
假使蚊蝱之　可使成樓觀　堅固不揺動　方求佛舍利
假使水蛭蟲　口中生白齒　長大利如鋒　方求佛舍利
假使持兔角　用成於梯蹬　可昇上天宮　方求佛舍利
鼠緣此梯上　除去阿蘇羅　能障空中月　方求佛舍利
若驢飲須酔　周行村邑中　廣造於舍宅　方求佛舍利
若使驢膚色　赤如頻婆果　善作於歌舞　方求佛舍利
烏與鵂鶹鳥　同共一處遊　彼此相順從　方求佛舍利
假使波羅葉　可成於傘蓋　能遮於大雨　方求佛舍利
假令大船舶　盛滿諸財寶　能令陸地行　方求佛舍利

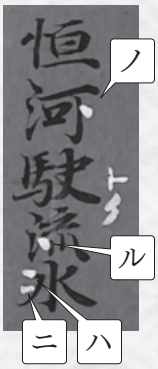
ヲコト点図（勝山幸人（一九八四）による）



仮名字体表（同）

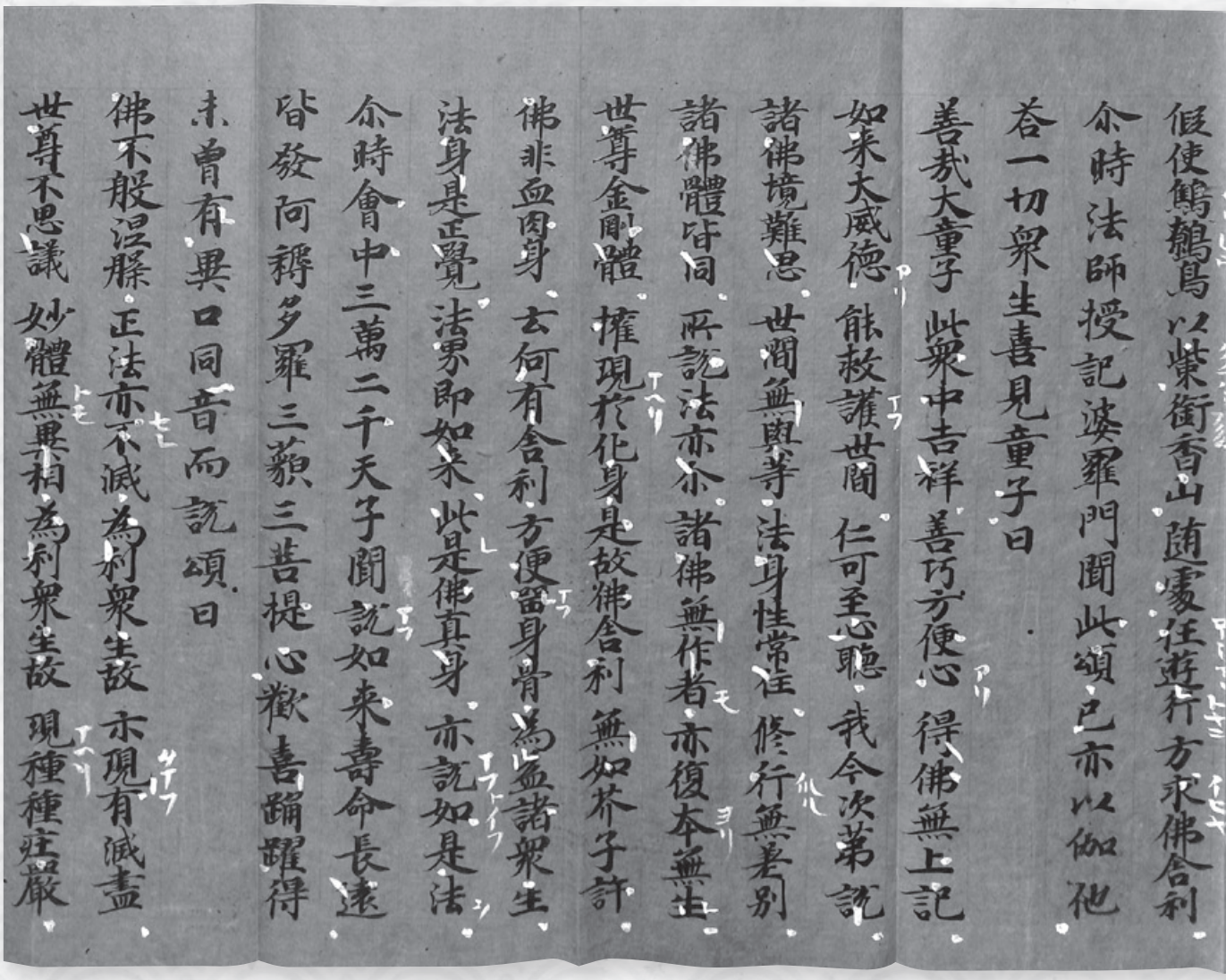


右のヲコト点と仮名の傍訓に従って加点当時の訓読を復元する。たとえば、展示箇所3行目の「恒河駅流水」は



恒河の駅ク流（る）る水には

となる。訓読文の平仮名はヲコト点から、片仮名は傍訓からの帰納で、（　）内は訓読者による補読を示している。



（次頁に白文と訓読）

【白文】

（爲我從明行足求斯一願作是語已）尒時童
子即爲婆羅門而説頌曰
恒河駃流水 可生白蓮花 黄鳥作白形 黒烏變爲赤
假使瞻部樹 可生多羅果 竭樹羅枝中 能出菴羅葉
斯等希有物 或容可轉變 世尊之舍利 畢竟不可得
假使用龜毛 織成上妙服 寒時可披着 方求佛舍利
假使蚊蚋足 可使成樓觀 堅固不搖動 方求佛舍利
假使水蛭蟲 口中生白齒 長大利如鋒 方求佛舍利
假使持兔角 用成於梯蹬 可昇上天宮 方求佛舍利
鼠縁此梯上 除去阿蘇羅 能障空中月 方求佛舍利
若蠅飲酒醉 周行村邑中 廣造於舍宅 方求佛舍利
若使驢脣色 赤如頻婆果 善作於歌舞 方求佛舍利
烏與鵂鶹鳥 同共一處遊 彼此相順從 方求佛舍利
假使波羅葉 可成於傘蓋 能遮於大雨 方求佛舍利
假令大舩舶 盛滿諸財寶 能令陸地行 方求佛舍利
假使鷦鷯鳥 以嘴銜香山 隨處任遊行 方求佛舍利
尒時法師授記婆羅門聞此頌已亦以伽他
答一切衆生喜見童子曰
善哉大童子 此衆中吉祥 善巧方便心 得佛無上記
如来大威徳 能救護世間 仁可至心聽 我今次第説
諸佛境難思 世間無與等 法身性常住 修行無差別
諸佛體皆同 所説法亦尒 諸佛無作者 亦復本無生
世尊金剛體 權現於化身 是故佛舍利 無如芥子許
佛非血肉身 云何有舍利 方便留身骨 爲益諸衆生
法身是正覺 法界即如来 此是佛真身 亦説如是法
尒時會中三萬二千天子聞説如来壽命長遠
皆發阿耨多羅三藐三菩提心歡喜踊躍得
未曾有異口同音而説頌曰
佛不般涅槃 正法亦不滅 爲利衆生故 示現有滅盡
世尊不思議 妙體無異相 爲利衆生故 現種種莊嚴

【訓読】（訓読文作成：藤田・古田）

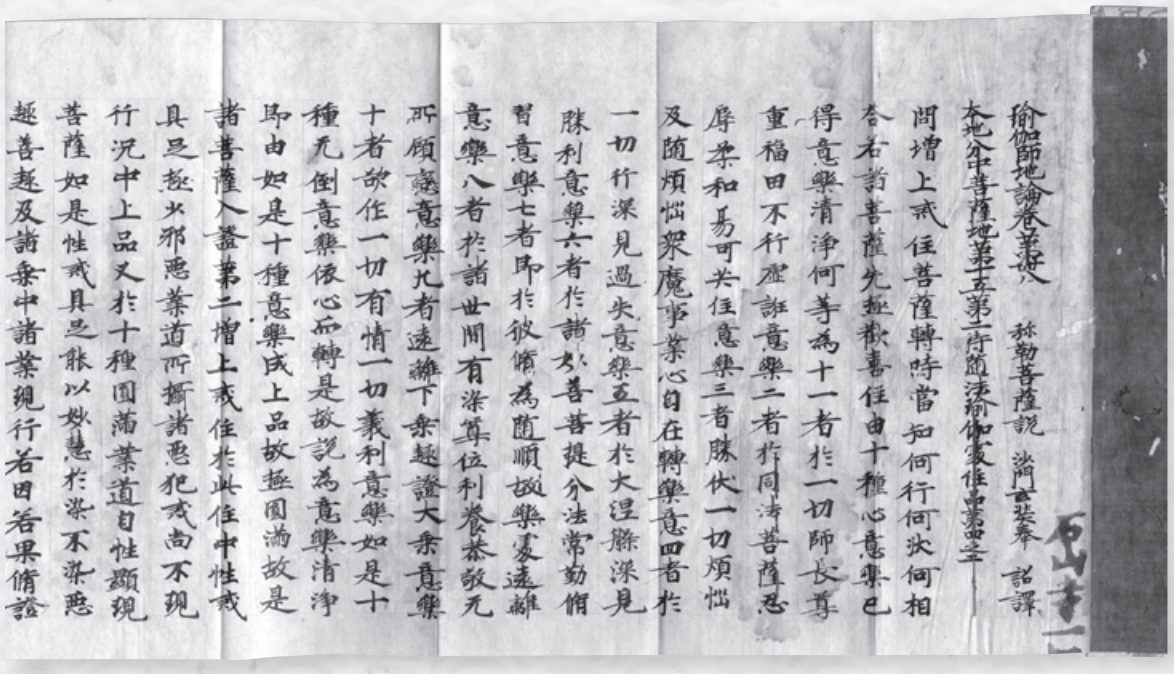
尒時(に)童子即(ち)婆羅門(の)爲に而(も)頌を説(きて)曰(く)
恒河の駃ク流(る)る水には　白蓮華は生(じ)ぬ可(し)。黄ナル鳥は白き形ト作り、黒き烏は變じて赤(く)も爲ム。
假使(ひ)瞻部樹には　多羅の果は生(じ)ぬ可(し)。竭樹羅の枝の中ニハ　能(く)菴羅(の)葉をば出デム。
斯(れ)等の希有の物は　或は轉變容可シ。　世尊の[之]舍利は　畢竟して得可(から)ざる[不]なり。
假使(ひ)龜の毛を用(ゐて)　上妙の服に織リ成し(て)　寒時に披ゲ着ル可かラム。方に佛舍利をば求(め)よ。
假使(ひ)蚊蚋の足を　[可使]樓觀と成(して)　堅固にして搖動(せ)ザラ[不]使ム可(から)むトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
假使(ひ)水の蛭蟲の　口の中に白き齒を生じ(て)　長大にして利キこと鋒の如くアラムトキ(に)　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
假使(ひ)兔の角を持(ちて)　用(ゐ)て[於]梯蹬に成し(て)　天宮に昇(り)上(る)可(から)むトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
鼠此の梯に縁(りて)上リて　[除去]阿蘇羅の　能く空の中の月を障(ふる)を除去セムトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
若(し)蠅酒を飲(み)醉(ひ)て　村邑の中に周行して　廣(く)[於]舍宅を造(ら)むトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
若使(ひ)驢の脣の色　赤(き)こと頻婆果の如し　善く[於]歌(ひ)舞(ふ)ことを作(さむ)トキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
烏と[與]鵂鶹鳥(と)　同(じ)く共に一處に遊(び)て　彼(れ)此レ相(ひ)順從せむトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
假使(ひ)波羅(の)葉をもて　[可][於]傘蓋に成(して)　能(く)[於]大(き)ナル雨を遮ヘツ可(から)むトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
假令(ひ)大(き)ナル舩舶に　諸の財寶を盛り滿(ちて)　能(く)陸地ヨリ行(かせ)令(め)むトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(めよ)。
假使(ひ)鷦鷯鳥　柴を以(て)香山を銜ム(て)　處に隨(ひて)任に遊行せむトキニ　方(に)佛舍利(をば)求(め)よとイヒキ。
尒時(に)法師授記婆羅門、此の頌を聞(き)已て、亦伽他(を)以(て)、
一切衆生、喜見童子に答(へて)曰(く、)
善哉、大童子、　此(の)衆の中に吉祥なり。　善巧方便の心アリ、　佛の無上の記を得たり。
如来は大威徳アリて、能(く)世間を救護(した)マフ。仁、至心をもて聽くべ(し)[可]。我今次第に説(か)む。
諸佛は境(は)難思なり。世間に與等(しきものは)無し。法身は性(は)常住なり。修行スルに差別無(し)。
諸佛は體(は)皆同なり。所説の法も亦尒なり。諸佛は作者モ無し。　亦復本ヨリ生ること無(し)。
世尊は金剛の體なり、[於]化身を權に現(じた)マヘリ。是の故に佛の舍利は　芥子許の如も無し。
佛は血肉の身に非(ず)。云何ぞ舍利有む。方便に身骨を留(めた)マフことは、諸の衆生を益せむが爲なり。
法身は是れ正覺なり、法界は即(ち)如来なり、此は是レ佛の真身なり、亦是如き法ヲ説(た)マフトイフ。
尒時會の中の三萬二千の天子、如来の壽命長遠なりと説(た)マフを聞(く)。
皆、阿耨多羅三藐三菩提の心を發(して)、歡喜し踊躍(し)て、
未曾有(なる)こと得。異口同音にして、[而]頌(を)説(て)曰(はく)、
佛は般涅槃(したまは)ず[不]。正法も亦滅(せ)ざれ[不]ども、　衆生を利(せむ)が爲の故、滅盡有と示現シタマフ。
世尊は不思議なり、妙體は異相無(けれ)ども、衆生を利(せむ)が爲の故、種種(の)莊嚴を現(じた)まへり。

瑜伽師地論（ゆがしじろん）　第四十八巻

山田郡舎人国足　天平16(744) 写　1帖　24.4×8.5cm（九州大学文学部所蔵　国文/11/47）

折本一巻。『瑜伽師地論』は、唐の玄奘によって訳された、全百巻よりなる瑜伽行派の根本論書の一つである。本学の所蔵本は、このうち巻四十八の写本一帖である。巻初に「石山寺一□[切経]カ」と見えることから、石山寺一切経の一本であることがわかる。これも春日本『金光明最勝王経』と同様に、元は巻子本であったものを折本に改装したものである。表紙、サイズが同一であるところから、同時期に行われたものであることがわかる。

本書の奥書には、「天平十六(744)年歳次甲申三月十五日／讃岐國山田郡舎人國足」とある。巻を通じて白点によるヲコト点・仮字点・一二三などの漢数字による返り点が見られるが、剥落しており、判読が困難な状態になりつつある。ヲコト点は、壺の上段左から右に向かってテニハと並ぶ、いわゆる第四群点に属する。仮名字体、ヲコト点などから平安初期の加点と推測できる。（蛭沼）



二　ヲコト点

たとえば、金光明最勝王経の図版などをよく見ると、個々の漢字の周囲に、いろいろな形状の点や線のような記号が書き込まれているのがわかる。この、位置と形状の相違によって一定の読みを指示する符号は、「ヲコト点」と呼ばれるものである。

今日に伝わる訓点本の古層は、奈良時代の終わりから平安時代のはじめに属するもので、どうやらそのころから加点ということがはじまったらしい。まだ万葉仮名の時代である。漢文の行間に訓（よ）み方を書き入れるにしても、万葉仮名では書くのに手間がかかるし、行間のスペースにもかぎりがある。そこで考え出され、しだいに形を整えていったのが、このヲコト点であり、片仮名だったのである。

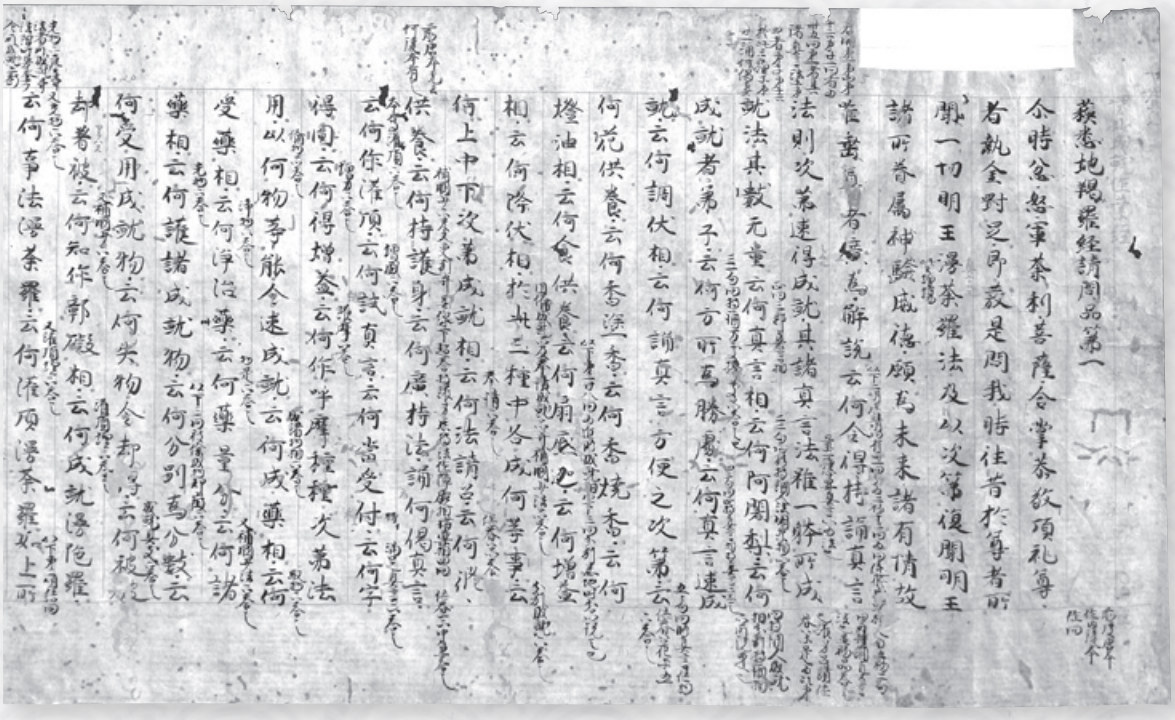
ヲコト点はもともと奈良の学僧たちによって工夫され、はじめのうちは文献ごとにまちまちで、個人的な使用にとどまっていたらしい。それが平安時代の中ごろから比叡山延暦寺（天台宗）に伝えられ、つづいて真言宗、博士家にも及び、宗派・学統ごとに専用するヲコト点が固定化していく。平安時代もおわりに近づくと統一・固定化が急速に進んで種類が減少し、鎌倉時代以後は衰退にむかうことになる。新仏教の諸宗派がおこり、従来の狭い宗派・学統で固定化したヲコト点の存在意義が薄れていったとも言われるが、さらに、片仮名の字形が社会的にある程度まで統一され、体系

蘇悉地羯羅経上巻　断簡

[書写者不明]　[平安時代末期]写　1軸　27.7cm(春日文庫/24)

木箱入り巻子零本。『蘇悉地羯羅経』は、唐の輸波迦羅によって漢訳された、全3巻からなる密教経典である。本経は、高麗本・宋本・和本の三種類があるが、本学所蔵の『蘇悉地羯羅経』は和本に対応するものとみられる。内容は、上巻11品、中巻6品、下巻17品の三十四品(章)を有するものであるが、この『蘇悉地羯羅経』は「第一請問品」から「第五択処品」の途中までの一巻しか残っていない。巻子には表紙がなく、渋紙の覆いを有する。この覆紙は元来巻の初めに糊づけしてあったもののようである。

墨筆による書入れと、朱筆による訓点が見られる。書入れは『蘇悉地羯羅経略疏』(円仁による注釈書)からの引用であることがわかる。ヲコト点は第一群点に属するニシハカ点である。巻末を欠くため、書写年・加点年は不明であるが、平安末期のものと推測できる。(蛭沼)



的な文字のセットに近づいており、訓点の記入にはそれを用いる方が簡単で便利だったこともある。

ところで、衰退後もヲコト点が細々と生きのびた世界がある。伝統と権威が最も重んじられるところ、大学である。大学寮の教官の位を世襲し、家学として学問を伝える博士家(紀伝道の菅原・大江、明経道の中原・清原など)の点は、後々まで伝統的に用いられたので、一般にはこれがヲコト点の代表とみなされ、ヲコト点という名称もここに発している。右肩の二つの点を上からつづけて読めばヲコトになるのである。また伝統的に助辞の類を総称して「テニヲハ」というが、これもこの点図の四隅の点を左下から時計回りに読んだところからでたものである。

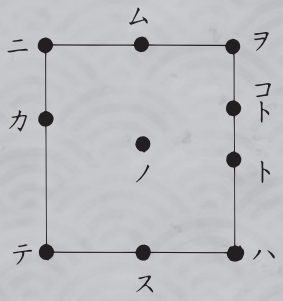


図　博士家点の一部

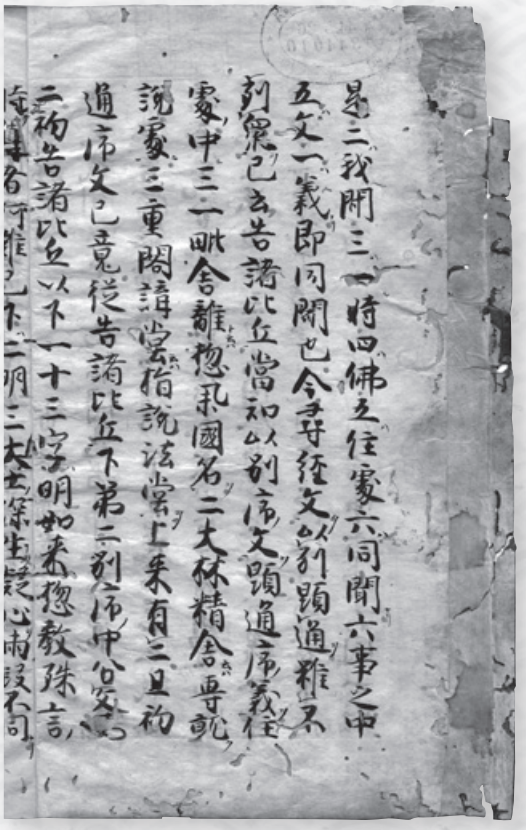
三　片仮名の発明

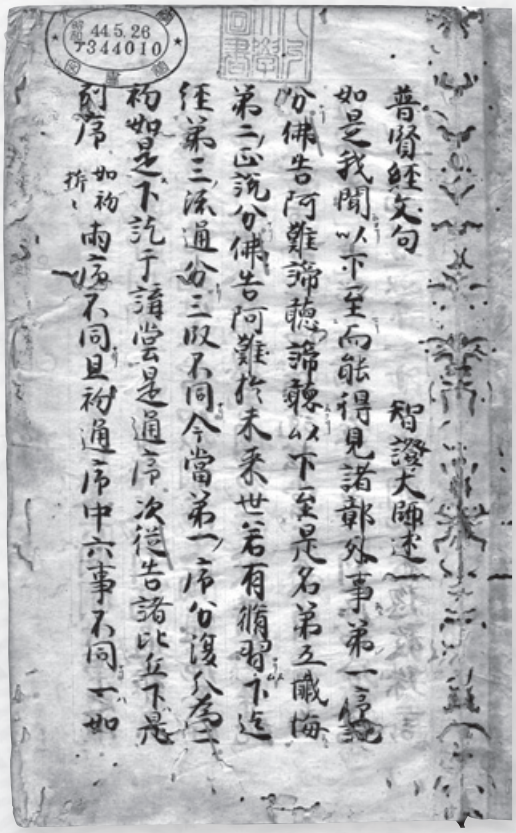
漢文訓読が日本語にもたらした大きなできごとの一つに、片仮名の発明がある。「名」とは文字のことであり、「仮名」は「かりそめの文字」、すなわち漢字に対して「正式ではない」文字の意。ふるくは「かりな」と呼ばれ、「かんな」

普賢経文句

[書写者不明]　承保2(1075)写　1冊　26.5×14.6cm(九州大学文学部所蔵　国文/100/43)

智証大師円珍(弘仁5－寛平3、814－891)述。粘葉装一冊。寸法タテ26.5cm×ヨコ14.6cm。墨付32丁。各面7行(押界あり。界高21.3cm×界幅1.6cm)。表紙の端に「おさえ竹」が残存しており、本書が元来巻子本であったことをうかがわせている。朱点(ヲコト点)、墨点(仮名点、雁点)が差されており、また処々に墨による異同の注記。ヲコト点は西墓点。巻末識語によれば承保2(1075)年7月1日の書写。但し虫損があって存疑。表紙左肩に外題「普賢経文句」、左下に「良誉」、右下方に「暹舜」の署名がある。天台宗が法華経の結経(法華経を説いた後に結論としてその要旨を述べた経)として重んじる観普賢菩薩行法経について、その経文を、序説・正説・流通に分けて組織立て、大綱を説明したもの。(高山)





の語形を経て「かな」となった。それに「不完全な」という意味の「片」が添えられたのが片仮名である。どこが不完全かと言えば、「阿」の偏から「ア」、「伊」の偏から「イ」、「宇」の冠から「ウ」、「江」の旁から「エ」、といった具合に、漢字の一部分だけでできているからである。仮名の対語は「真名」であり漢字そのものをさす。漢字の形のままでの表音的な用法、すなわち万葉仮名は、したがって「真仮名」とも呼ばれるのである。

阿 伊 宇 江 於
ア ← イ ← ウ ← エ ← オ ←

加 幾 久 介 己
カ ← キ ← ク ← ケ ← コ ←

片仮名字母

万葉仮名の画数を省いて表記の効率を上げる用法は、古くから役所の文書などに見られるのだが、記号体系としての片仮名は、まぎれもなく漢文訓読の世界で生まれ成長していった。行間のかぎられたスペースに、スピーディに訓読の情報を記入するために、万葉仮名に代わる道具としてスリムな片仮名が出現する。ここまではヲコト点の創出と軌を一にするが、個々の片仮名が形状の相違だけで他から区別され、漢字に対する位置の情報を必要としない点、すなわち漢字に隷属しないところに、将来における両者の盛衰の別れ目があった。片仮名は、スペースさえ許せば、漢文の行間をはなれ、訓点以外の諸情報をも自由に書き込めたのである。

紺紙金字無量義経　断簡

[平清盛・頼盛]　[嘉応2(1170)～承安2(1172)]写　1軸　19.8cm(春日文庫/105)

木箱入り巻子零本。『無量義経』は、481年南斉の曇摩伽陀耶舎によって訳された大乗経典である。『法華経』の開経とされ、『観普賢経』の結経と併せて法華三大部と称される。一巻三品(章)からなるが、本学所蔵の『無量義経』は第二品の前半部のみである。漆塗りの経筐に、「平相国清盛公」の極札(鑑定書)2通および春日政治先生による解説一葉を有す。春日先生によると、厳島神社には、いわゆる「平家納経」とは別に、平家写経が収められている。「平家納経」が、表紙・見返し・料紙・金具・紐・軸に、当代の絵画・工芸の最高技術を駆使した装飾経で、平氏一門が一人一巻ずつ写経したものであるのに対して、この平家写経は紺紙に金泥の経巻で、平清盛・頼盛の二人によって書写されたものである。元は『法華経』『無量義経』『観普賢経』があったようであるが、『法華経』第四巻と『無量義経』は早くに逸してしまった。本学所蔵の『無量義経』はその一部であると考えられている。(蛭沼)

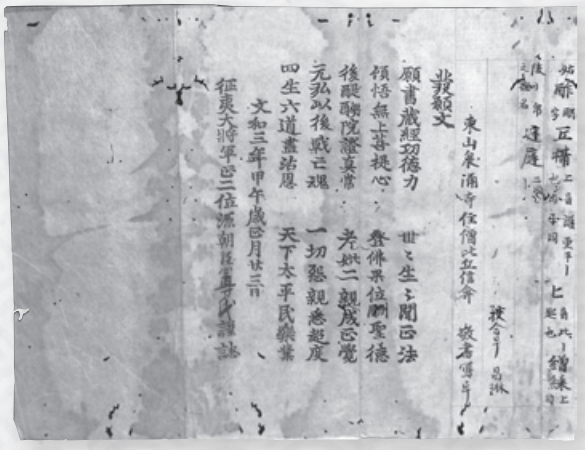
四　仮名が削ぎ落としたもの

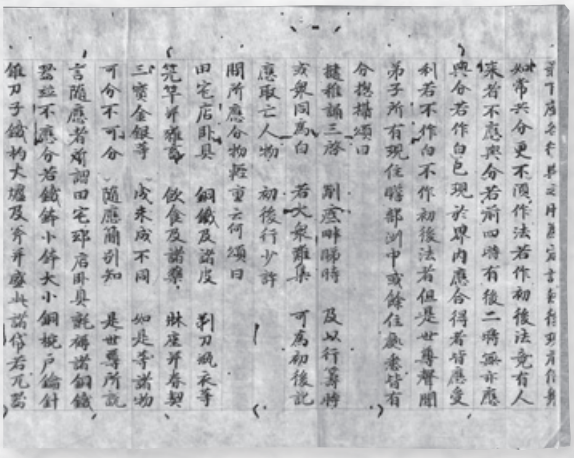
万葉仮名では、多くの場合、可我見(鏡)、須受之(涼し)、等杼米(止め)、波婆可流(憚る)のように清濁を別の字で書き分けている。清濁が具体的にどのような音声的相違であったかは慎重に考える必要があるが、万葉仮名は漢字であり、中国語にもそれに近い音の対立があって、漢字で書き分けることができたのである。それが、安→あ、以→い、宇→う、阿→ア、伊→イ、宇→ウのように漢字から仮名が作り出される過程で、右の我・受・杼・婆のような濁音仮名が消えていき、清音仮名が清濁に両用されるようになる。以後、平仮名主体の仮名文の世界では清濁は書き分けないのが通例となった。ちょっと慣れれば容易に実感できることだが、濁音は語の形態や文脈で予測可能な場合が多く、それで概ねこと足りるのである。漢文訓読の世界で発達した片仮名も基本は同じだが、こちらは訓詁注釈の必要に応じて濁点を施すこともある。結局、仮名の表記システムでは、必要があれば清濁を補助符号の有無で区別することになった。傘／日傘、猿／山猿のような連濁と呼ばれる現象を通じて、清音と濁音は緊密な関係にある。そこで、「加」字や「須」字から作られた「カ」「ス」と、濁音仮名である「我」字や「受」字から、たとえば「戈」「ス」のような仮名を作って、「カ／戈」、「ス／ス」のように、形の上で何の関連性もない清濁のペアを作るより、同一記号に補助符号(濁点)をつけて「カ／ガ」、「ス／ズ」のペアにする方が、文字数を効率よく減らすこともでき、むしろ合

根本薩婆多部律摂　第七巻　断簡（足利尊氏発願一切経）

足利尊氏　文和3 (1354) 写　1帖　27.3×11.6cm（春日文庫/23）

折本零本。『根本薩婆多部律摂』は、小乗の上座部に属する根本一切有部派の戒本を勝友が解釈し、精要を示したもので、これを唐の義浄が漢訳した。全14巻からなるが、本学所蔵の『根本薩婆多部律摂』は、巻七の後半のみである。また、巻末に音義を付す。末尾に木版刷りの発願文と「文和三年(1354)甲午年正月二十三日／征夷大将軍正二位源朝臣尊氏謹誌」の識語を有するところから、足利尊氏発願一切経の一部であることがわかる。足利尊氏は、後醍醐天皇や元弘の乱(1331－32)以後の戦没者の供養、また亡母の十三回忌追善のために、京都・奈良・鎌倉などの諸寺院の僧に一切経五千余巻を写経させ（本経は京都の泉涌寺の僧の書写であることがわかる）、足利氏の菩提寺である等持院に収めた。後に園城寺（三井寺）に移され、現在は約600巻が伝存している。（蛭沼）





理的といえるのである。

また、万葉仮名は漢字であり、漢字には声調がある。現代北京語には第一声から第四声までの四つの声調があるが、万葉時代にあたる頃の中国語にも平声・上声・去声・入声という四つの区別があった（現代北京語の四声とは必ずしも同じではないが）。したがって、その気になれば、この声調を利用して日本語の高低アクセントを書き分けることも、ある程度はできただろう。事実、日本書紀の一部にはそれらしき痕跡がある。日本書紀の述作には複数の人間が関わっており、いくつかのグループに分かれて作業を分担していたらしいことが判っているが、万葉仮名で歌謡などを表記する際に、漢字原音の声調もある程度考慮しながら文字選びをした者が一部にいたようで、その結果、その部分は当時の日本語のアクセントまである程度反映するものになったと考えられる。

さて、こうして見てくると、漢字の衣を脱ぎ捨てることで、仮名は、清濁や高低といった、いくつかの識別能力を削ぎ落としてしまったようである。これははたして進歩といえるのだろうか？

ところで、乳幼児がどの言語を獲得するかは、民族や国籍に関係なく、その言語環境によって決まる。どういう言語環境のもとに育つかは、生まれてくる子供の予測できるところではない。にもかかわらず、あらゆる言語の母語話者になれるということは、幼児はあらゆる言語の音声を識別し文法を理解する能力を潜在的に持っているということに他ならない。そして、特定の言語に接し、それを獲得する

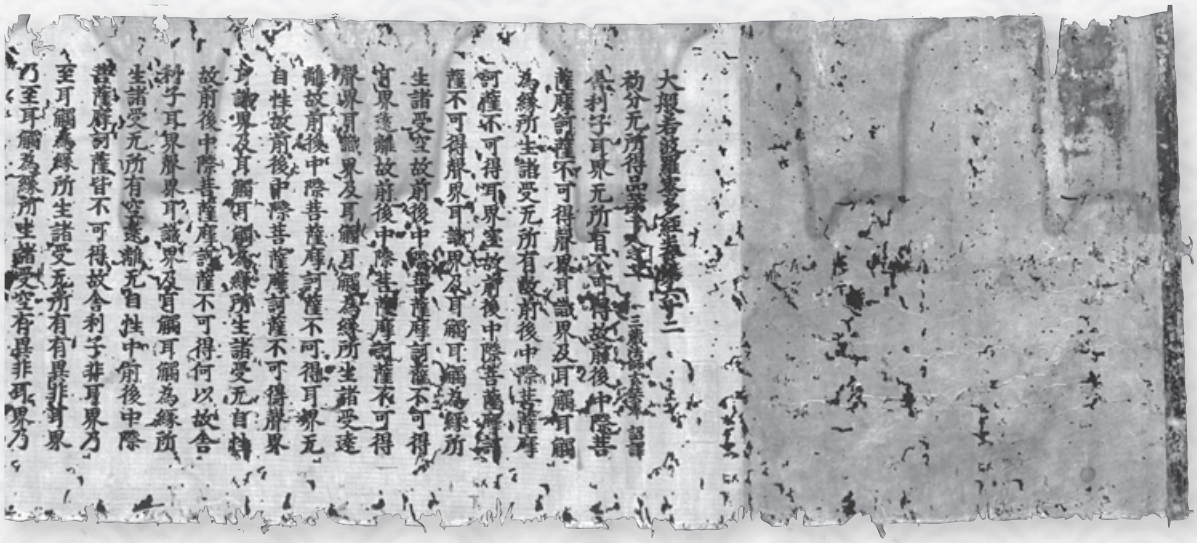
大般若波羅密多経　巻第六十二（春日版）

[出版者不明]　[出版年不明]　1軸　26.6cm（春日文庫/308）

巻子1軸。『大般若波羅蜜多経』は、緒般若経の原典の翻訳が集大成された、六百巻からなる一大叢書である。唐の玄奘の訳。十六会（経典）から成り立っているが、本学の所蔵本はこのうち第六十二巻（第十八品之二）である。

巻子本ではあるが、写本ではなく、版本である。日本には、江戸時代以前から印刷が行われ、春日版・高野版・五山版など数種類の古版本が存する。本経は春日版であると考えられる。春日版とは、平安時代後期以降、奈良の興福寺や春日大社から出版された経典をいう。

本経は刊記が削られているため、いつ印刷されたものであるのかは不明であるが、中世後期のものと考えられる。また、朱によって句読が示されている。（蛭沼）



過程で、神経回路の整理が進み、不要な能力を削ぎ落としていく。枝道を刈り込んで広い道路にしたようなものである。やがてある時期がくると新たに言語を獲得する能力は閉ざされるが、これは既得の言語をより効率よく運用するための戦略なのである。

日本人が漢字という優れた文字に接し、その潜在能力のいくつかを削ぎ落としながら仮名を作り上げたのも、必要にして十分な、日本語に特化した文字を獲得するために必要な行程だったのだろう。やがて日本語は、表語性の高い漢字と、表音文字である仮名とをバランスよく組み合わせた、漢字仮名交じりという表記システムを手にすることになる。

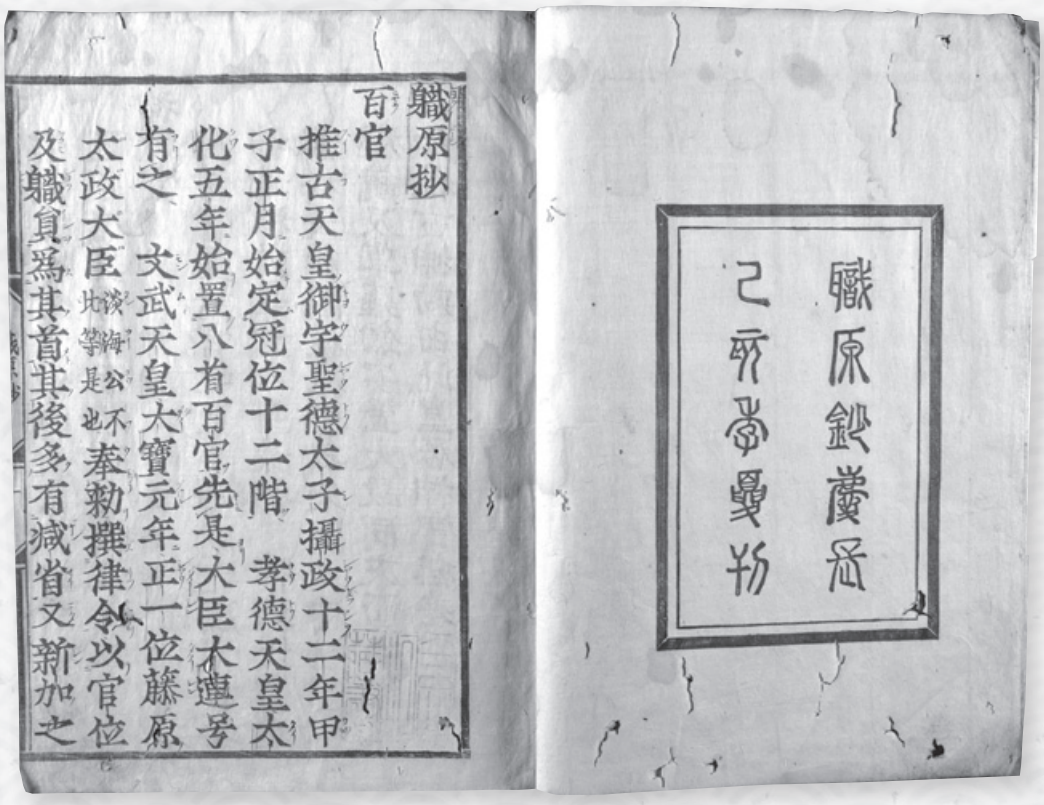
慶長勅版　職原抄

[出版者不明]　慶長4(1599)刊　1冊　29.2×31.2cm(春日文庫/22/2)

豊臣秀吉の行った朝鮮出兵(文禄の役(1592-1593))は、日本に朝鮮活字版の技術を伝えることになった。そこで、後陽成天皇の勅命で日本初の活字本が刊行された。この印刷事業は、数年を経て、慶長2(1597)年の『錦繡段』に始まり、同4(1599)年に『日本書紀神代巻』『古文孝経』などが作られ、争乱による中断を挟みながら、同8(1603)年の『白氏五妃曲』まで作られた。これらの活字本を「慶長勅版」という。

本書は慶長4(1599)年刊行のもので、南北朝期に『神皇正統記』を著した北畠親房による有職故実書である。見返しの四周双辺の木記には「職原鈔慶長／己亥季夏刊」とある。

巻首に今出川蔵書の印があり、京都の今出川家旧蔵であったものが、筑後願壽寺から出たという、春日政治先生による解説の一葉がある。(門屋)



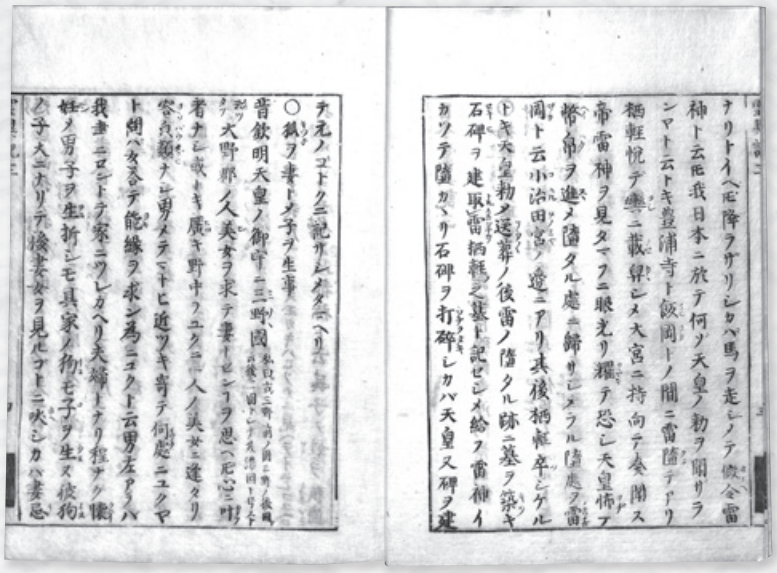
五　文章語の形成

我関せず焉、という慣用句がある。「急激に一切の政治的問題に背を向ける、我関せず焉の態度に変り、…」(丸山真男「「である」ことと「する」こと」)のように用いられるが、焉の字はそのままエンと読む。夏目漱石が正岡子規に宛てた書簡の中にも「そんならなぜもつと愉快な所へ移らないかと云ふかも知れないが、其処に大に理由の存するあり焉さ。」(『倫敦消息』二)といった表現がある。現在の漢文教育では「置字」として読まないことになっている虚詞の類を、このように音読みにしてくっつける訓読法もあったのである。若き日の漱石が漢学を学んだ三島中洲の二松学舎では「其ノ餘ハ則チ日月ニ至ル焉而已矣」のような読み方をしていたという。漢文の字面を忠実に残さずに読もうとする流儀を汲むもので、白文の記憶には都合がいいが、日本語の格に外れ過ぎるという批判もあった。

しかし、漢文訓読調は長い年月をかけて培われてきた文章語であり、日常的な口頭語からみれば、多かれ少なかれ不自然なものとも言える。

不自然といえば、「文選読み」と呼ばれる読み方もある。たとえば「窈窕淑女」を「窈窕トシテヲヤカナル、淑女ノヨキムスメ」のように、まずは音で読み、さらに訓でくりかえすもので、学僧が経典の学習のために工夫した読誦法が、大学寮の博士・学生たちにも伝わったと言われている。原文とその解釈を同時に暗誦しようという、なかなか欲張りな訓読法である。

『日本霊異記(日本国現報善悪霊異記)』上中下三巻は平安初期に成った仏教説話集。僧景戒撰。変体漢文(変則的な漢文)で表記されており、文体史研究のよき資料となる。春日文庫には、彰考館(しょうこうかん)本(延宝本)を天和3(1683)年に写した旨の識語をもつ写本、正徳2(1712)年興雲斎(こううんさい)の叙をもつ『仮名本霊異記』を明治14(1881)年に再刊した『説教必用日本霊異記』、狩谷棭斎の校訂にかかる『校本日本霊異記』(春日文庫のものは大正14(1925)年刊の群書類従特別製本)、同じく棭斎による訓詁注釈『日本霊異記攷證』などがある。(高山)



『説教必用日本霊異記』(仮名本霊異記)

村上勘兵衛　明治14(1881)刊　3冊　26×18.1cm(春日文庫/14)

狩谷棭斎(こうしょう)『日本霊異記攷證』

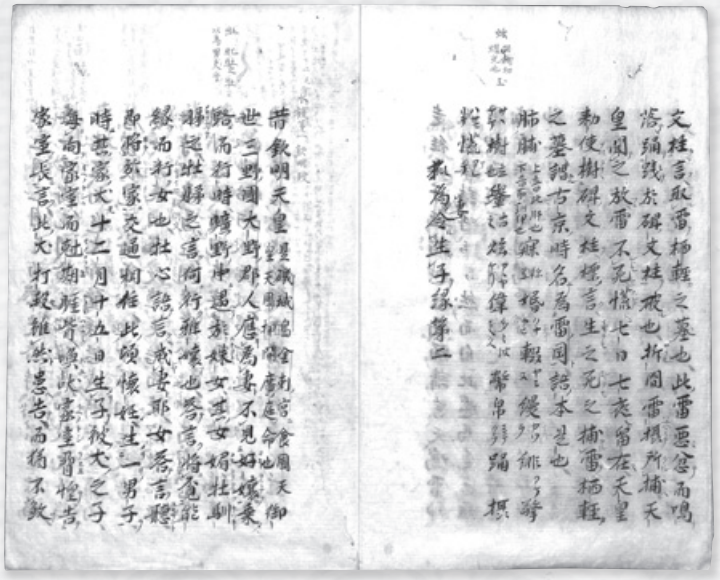
狩谷棭斎　萬笈堂刊　[出版年不明]　3冊　25.2×17.6cm(春日文庫/12)

日本人は、古くから中国語の文章、すなわち漢文を積極的に受容し、その理解に努めてきた。古代律令国家を形成する思想と諸制度はむろん中国に倣ったものであり、仏教の受容も漢訳仏典を通じてのものであるから、漢文が諸学問の基礎となったのは言うまでもない。そして、固有の文字を持っていなかった日本語にとって、漢文を「翻訳する」といういとなみは、そのごく初期においては、日本語の表記法そのものをめぐる試行錯誤にほかならず、同時にそれは文章語(書き言葉)という新たな日本語を創造する過程でもあった。

漢文訓読の草創期には、訳語は固定せず、同じ漢字でも文脈に応じて適宜翻訳していくような自由な意訳がおこなわれていた。訳語も当時の話し言葉であったことは言うまでもない。訓読という作業を通じてはじめて日本語を書くことが可能になったのであり、漢文訓読法の歴史は、そのまま文章語(書き言葉)の創出と変遷の歴史でもあった。

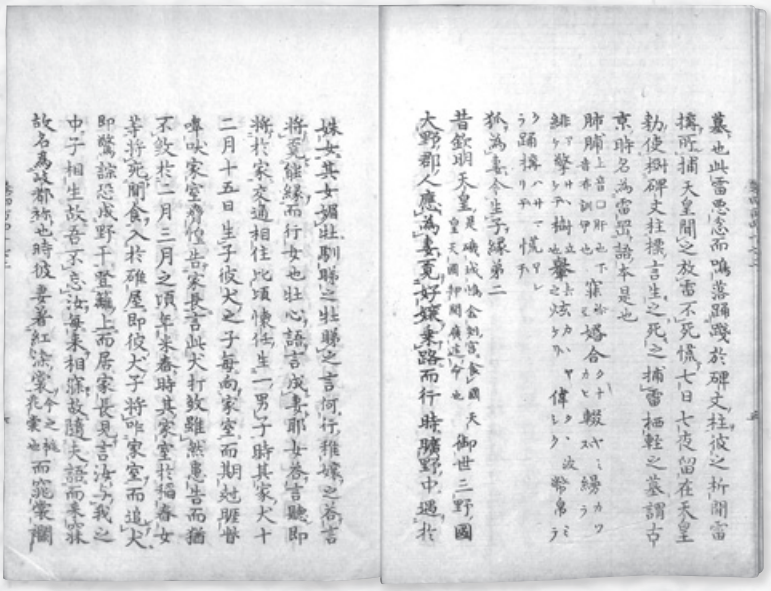
一定の文字や構文に対する読み方は、時とともに徐々に固定化し、形式化されていくようになる。型にはまった逐語訳は、話し言葉にはない文章語特有の語法を生み出すことになった。たとえば、ホリス・ネガフ・オモフ・ムトスのように文脈に応じて読み分けられていた「欲」の字が、ホリスの音便形ホッスで固定化すると、べつに日暮を待ち望んでいなくとも「日暮れむとほっす」のような表現が生まれてくる。

また、本来は場所を示す意味しかなかったトコロという語は、「所」の字の和訓として定着



日本霊異記天和三年写本

[書写者不明]　天和3 (1683)写　3冊　28.4×18.8cm(春日文庫/11)



狩谷棭斎(かりやえきさい)『校本日本霊異記』(群書類従本)

狩谷棭斎　青山堂刊(複製版)　大正14(1925)　3冊　27×18.6cm(春日文庫/13)

すると、所謂・所信・所望・所有のような受身や行為の対象を漠然と示す「所」字の用法にあわせて「〜であるところの」「〜するところの」といった抽象的な意味用法を獲得し、これが近代に至ってヨーロッパ語の関係代名詞の翻訳語として定着することになる。英語の翻訳文体が近代の文章語に大きな影響をおよぼしたのは周知の事実だが、その背景にも千年以上の歴史をもつ漢文訓読の影が見えかくれするのである。

五逆秋（無門関抄）

梵誉　貞享3 (1686)写　1冊　24.7×20.0cm（春日文庫/16）

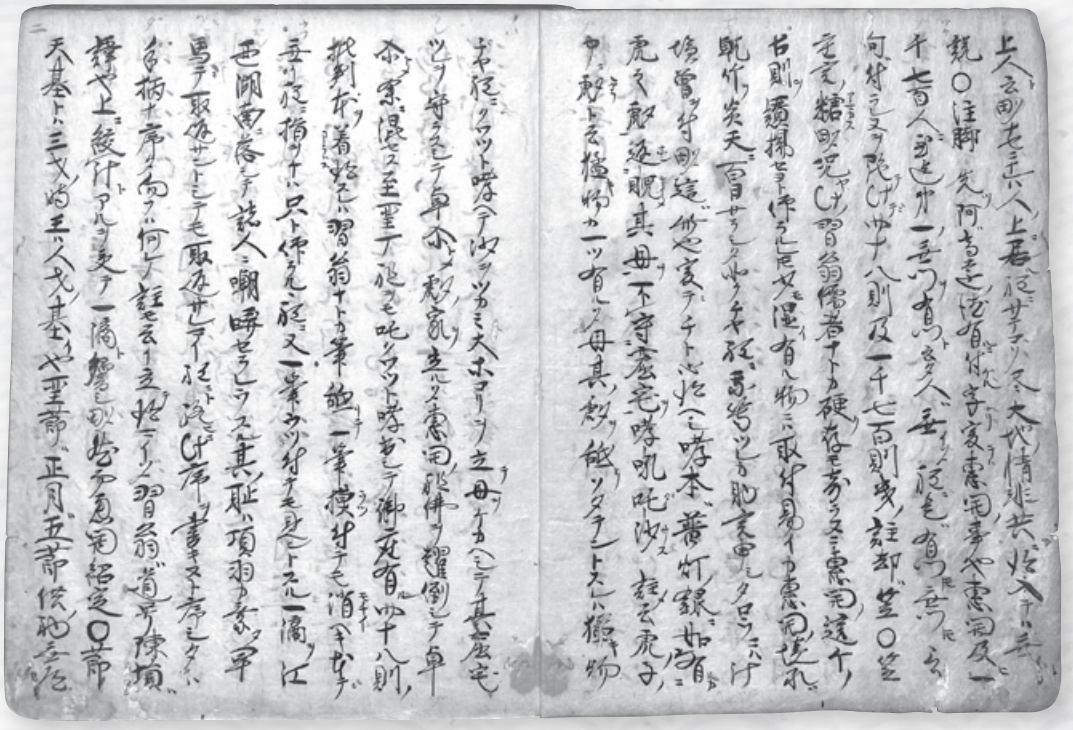
貞享3（1686）年書写。一冊。本文は漢字片仮名交じり文。一部の助詞助動詞、活用語尾が漢字右下に小書きされる。朱は旧所蔵者によるもの。

慶長15（1610）年に行われた円応による「無門関」の講義を、首座に列する関牛が聞書きした草稿に、円応が添削を加えて原本を作成。それを貞享3（1686）年に梵誉（1644-1717）が書写したものが本書である。

「無門関」とは、南宋の紹定1（1229）年に無門慧開が著した禅宗の基本文献のひとつ。鎌倉時代に臨済宗の僧である心地覚心が日本に伝え、室町から江戸時代にかけて広く一般に流布し、市井の心学や文学にも影響を与えた。

円応は、下総白金にある浄土宗関東十八壇林のひとつ、仏法山東漸寺の八世。梵誉は、浄土宗の清光山果還院極楽寺（現在は福岡市南区若久に所在）七世に当たる。東国で成立した原本が、どのような事情で福岡に住む梵誉に書写されたのかは不明である。

本書のような仏書の注釈書は抄物と呼ばれ、書名は「～抄」と称されるのが普通だが、表紙中央に本文とは別筆ながら「五逆秋」とあることから本書はこのように呼ばれる。（藤田）



○　○　○

政治博士に『仮名発達史序説』の著書があり、戦後の出版事情により上梓されなかったが、『国文体発達史序説』もある（その後、著作集に入ることで日の目を見た）。和男博士には『説話の語文』という著書がある。いずれも、仮名や文体、そして語法の変遷を深く掘り下げた労作であり、金字塔である。春日父子が残されたこのコレクションが、当該分野の第一級の資料群であることは疑いがないが、それにとどまらず、国語学・国文学全般にわたる宝庫でもある。広く外部にも公開し、利用が広がることを願っている。

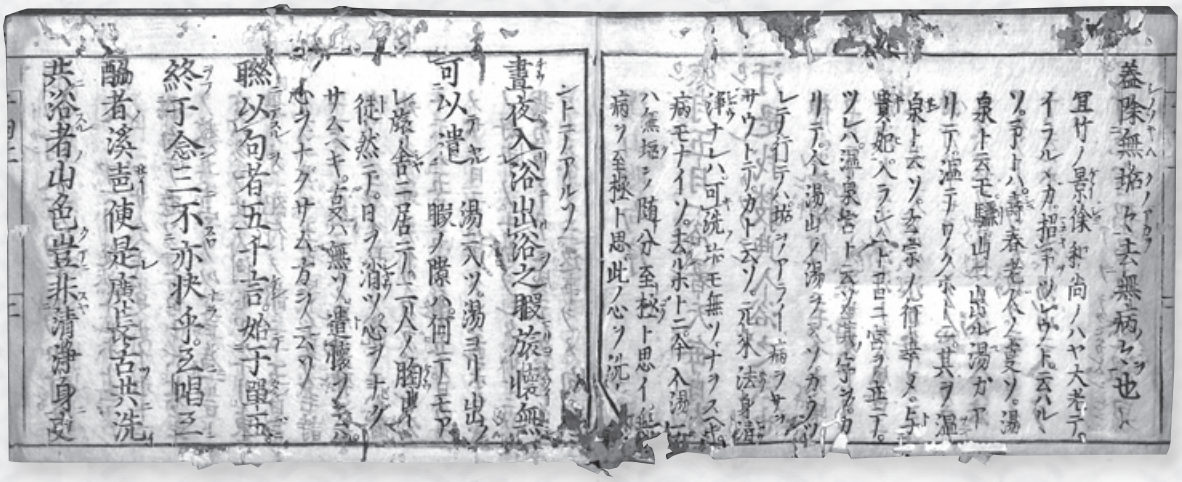
湯山千句抄

[出版者不明]　[寛永7(1630)]刊　2冊　13.5×18.5cm(春日文庫/65)

無刊記。刊本。書形は横本。上下2冊。序文・本文・跋文をそなえ、序文と本文の間に目録があり、韻字が列挙されている。五言からなる句が二句示され、その後ろに一字下げて漢字片仮名交じり文によるその句の解説が記されている。聯句部分には読み仮名や返り点が施され、解説部分には部分的に読み仮名や濁点が見られる。

内容は、摂津国有馬温泉に湯治に行った禅僧の景徐周麟と寿春妙永との間で応酬製作(明応9(1500)年5月5日―同月23日)された「湯山千句」についての、一韓智翊による注釈。一韓智翊は、景徐周麟の学問上の弟子にあたる京都五山の禅僧である。

本書は、ほとんどの文末がゾで結ばれている。これは、室町時代に数多く作られた漢籍・仏書等の注釈書である抄物の文体的特徴である。(藤田)



参考文献

執筆
高山倫明(九州大学大学院　人文科学研究院　教授)
作品解説執筆
蛭沼芽衣(九州大学人文科学府博士課程)
門屋飛央(九州大学人文科学府博士課程)
巣山優希(九州大学人文科学府博士課程)
藤田優子(九州大学人文科学府博士課程)
古田龍啓(九州大学人文科学府博士課程)

参考文献

生駒哲郎（二〇〇八）「足利尊氏発願一切経考　―尊氏の仏教活動と一切経の書写―」『東京大学史料編纂所研究紀要』一八
石山寺文化財綜合調査団（一九七八）「石山寺の研究　一切経篇」法蔵館
稲城信子（一九九七）「鎌倉期における経典印刷と流布　春日版大般若経を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』七二
犬飼隆（二〇〇八）『漢字を飼い慣らす　日本語の文字の成立史』人文書館
大塚光信・尾崎雄二郎・朝倉尚（一九九五）『新日本古典文学大系 五三 中華若木詩抄・湯山聯句鈔』岩波書店
大塚光信（一九五七）「湯山千句の抄」『国語国文』二六―三
大野晋（一九五三）『上代仮名遣の研究』岩波書店
大野透（一九六二）『万葉仮名の研究』明治書院
岡田希雄（一九三四）「慶長版和玉篇版種攷」『立命館文学』一―一
沖森卓也（二〇〇〇）『古代日本の表記と文体』吉川弘文館
尾上八郎（一九二六）『平安朝時代の草假名の研究』雄山閣
加地宏江（一九七四）「職原鈔諸本の系譜―思想史的考察への序説―」『日本歴史』三一七
春日和男（一九六三）「慶長十五年聞書貞享三年書写五逆秋（無門関鈔）の国語学的研究（一）―序　指定辞の様式―」『文学研究』六一輯
春日和男（一九七一）「慶長十五年聞書貞享三年書写五逆秋（無門関鈔）の国語学的研究（二）―序　指定辞の様式2―」『文学研究』六八輯
春日和男（一九七七）「蘇悉地羯羅経古点の一本より」『国語国文』四六―四
春日政治（一九三三）『仮名発達史序説』岩波書店
春日政治（一九三五）「金光明最勝王経註釈一本の古点について」『日本文学論纂』（『古訓点の研究』風間書房（一九五六）所収）
春日政治（一九五八）「石山寺本最勝王経古点より」『国語国文』二七―一一
勝山幸人（一九八四）「金光明最勝王経の古訓法について」『野州国文学』三三
鎌田茂雄ほか編（一九九八）『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版
亀井孝（一九七〇）「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったか―をめぐってかたる」『一橋大学研究年報（人文科学研究）』一二
川瀬一馬（一九五五）『古辞書の研究』講談社
京都大学文学部国語学国文学研究室編（一九七八）『湯山聯句鈔　京都大学蔵』臨川書店
金田一春彦（二〇〇一）『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館
小林芳規（一九六七）『平安鎌倉時代における漢籍訓読の国語史的研究』東京大学出版会
小林芳規（一九七七）「漢文訓読体」『岩波講座日本語』一〇　岩波書店
小松英雄（一九七三）『国語史学基礎論』笠間書院
佐伯俊源（二〇一三）「金光明最勝王経の思想と伝流」『総本山西大寺編　国宝西大寺本金光明最勝王経　天平宝字六年百済豊虫願経　巻六～巻十　解題』勉誠出版
柴田昭二（一九八〇）「平安初期における漢文の一訓について」『香川大学国文研究』五
鈴木直治（一九七五）『中国語と漢文』光生館
高山倫明（二〇〇三）「字音声調と日本語のアクセント」『国語学』五四―三
田籠博（一九七五）「円応の抄物について―洞門抄物の周辺―」『語文研究』三九・四〇
田籠博（一九七八）『五逆秋（無門関抄）本文と解題』島根大学
築島裕（一九六三）『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
築島裕（二〇〇九）『訓点語彙集成　総論・載録文献一覧』汲古書院
長澤規矩也（一九七六）『図解和漢印刷史』汲古書院
長澤規矩也（一九七九）『図書学辞典』汲古書院
奈良帝室博物館編（一九四〇）『平家納經圖録』便利堂
廣庭基介・長友千代治（一九九八）『日本書誌学を学ぶ人のために』世界思想社
福井久蔵（一九二六）『大日本歌書綜覧　上』不二書房
松井輝昭（二〇一四）「厳島神社史における平清盛の幻像」『宮島学』溪水社
水谷真成（一九六八）「梵語音を表わす漢字における声調の機能―声調史研究の一資料―」『名古屋大学文学部二十周年記念論集』
望月信亨（一九五四）『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会
森博達（一九九九）『日本書紀の謎を解く―述作者は誰か―』中公新書
山本信吉（二〇一三）『貴重典籍・聖教の研究』吉川弘文館
頼惟勤（一九五一）「漢音の声明とその声調」『言語研究』一七・一八

平成28年度九州大学開学記念行事・第57回附属図書館貴重文物展示

真仮名、かな、カナ

―仮名と文体の発達史―

発行日　平成28年5月13日

編集発行　九州大学附属図書館
〒812-8581　福岡市東区箱崎6-10-1
TEL:092-642-2533　FAX:092-642-2205
E-mail: touservice@jimu.kyushu-u.ac.jp
URL: https://www.lib.kyushu-u.ac.jp

印刷　城島印刷株式会社
〒810-0012　福岡市中央区白金2-9-6
TEL:092-531-7102　FAX:092-524-4411